



鳥取県八頭郡船岡町

牧野遺跡発掘調査報告書

1980・3

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会

序

牧野遺跡は見櫻川左岸にある標高90～100mの丘陵地にある。

現況は、西瓜・大根・馬鈴薯・豆類等を主として栽培する農家の主要な畠地であり、年を追って專業農家の減少が進むにつれ、大型機械の導入、省力栽培等の時代の流れの中で、農業振興が最も切実な希願であり、この時に昭和55年度より町営農村地域農業構造改善事業隼地区集団農区総合整備事業が計画され、地元農家の協力を得て施行のはこびになり、今回、緊急事前調査を実施する事にした。

牧野丘陵は氷河時代（洪積世）に降下した大山の火山噴出物によりおおわれている。現在では黄色や赤色の土として見えるのがそれであり、表面に薄く黒色の土がかぶさっている。このことから、この丘陵地は古代人が外敵や洪水等の災害から身を守るに最適な場所であり、泥炭でなく、日当りも良く居住に適したところと思われる。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器の破片と若干の木炭・鉄器等があり、この丘陵には約2,000年前頃より人間が住みはじめたものと思われる。

今回の発掘調査により判明した遺跡として7世紀前半の円墳（高塚）と柱穴状遺構（住居址を暗示）土壙墓、そして木棺墓（屈葬）が確認されている。その内円墳と木棺墓については本調査に移行して実施、記録保存とし、住居址遺構（A・Bトレンチ）については、ほ場整備施行に支障ないので埋戻し保存する事とした。

本事前調査で、これをもって全貌を推定するのは早計であるが、何らかの示唆を与えることのできたのは何よりであり、且亦地域農業の今後の発展を希求するものにとって、未知の文化の研究・保存、並びに地域住民の文化財に対する認識が高まつたことと、農業の近代化とを共に喜ぶものである。

なお、調査時期が酷暑の折りに当り、困難を極めたが、終始献身的にご指導いただいた県教育委員会文化課・森田純一（調査指導）、治部田史郎（調査主任）、松下利秀（調査員）の諸氏、並びに作業にご尽力いただいた地元関係者の方々に対して末尾ながら厚くお礼申し上げます。

昭和55年3月19日

船岡町教育委員会教育長

西 尾 親 義

例　　言

1. この報告書は、農村地域農業構造改善事業単地区集団農区総合整備事業の実施に伴なって行った埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査は、船岡町教育委員会が「牧野遺跡緊急発掘調査」としての国の補助を受け行なった。尚、古墳発掘本調査については町費で実施した。
3. 期間は1979年5月14日から1980年3月19日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、適宜県教育委員会文化課の指導助言を得た。
5. 本書の作成には、森田純一・治部田史郎氏の協力を得て、松下利秀・浦林寿男・田中一男が執筆編集した。
6. トレンチ分布図については町産業課作製の1/1000地形図を使用した。
7. 本書に使用した方位は全て磁北を示す。
8. 遺物の保管は船岡町教育委員会で行なっている。

調　　査　組　織

調査主体：船岡町教育委員会

調査団長：西尾親義（船岡町教育委員会教育長）

調査指導：森田純一（鳥取県教育委員会文化課文化財主事）

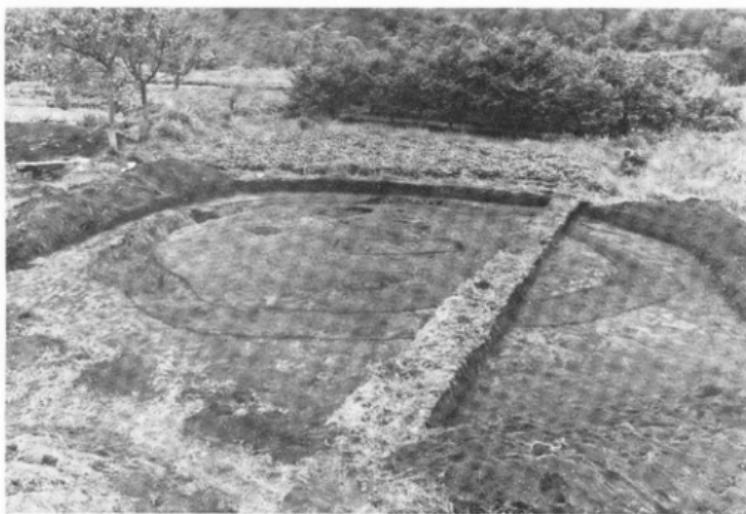
調査主任：治部田史郎（船岡町嘱託）

調　　査　員：松下利秀（船岡町嘱託）、木下俊雄、田中登貴男、中家誠次、浦林寿男、西尾政美（以上、船岡町文化財専門委員）、田中一男、橋本正太郎（船岡町教育委員会）

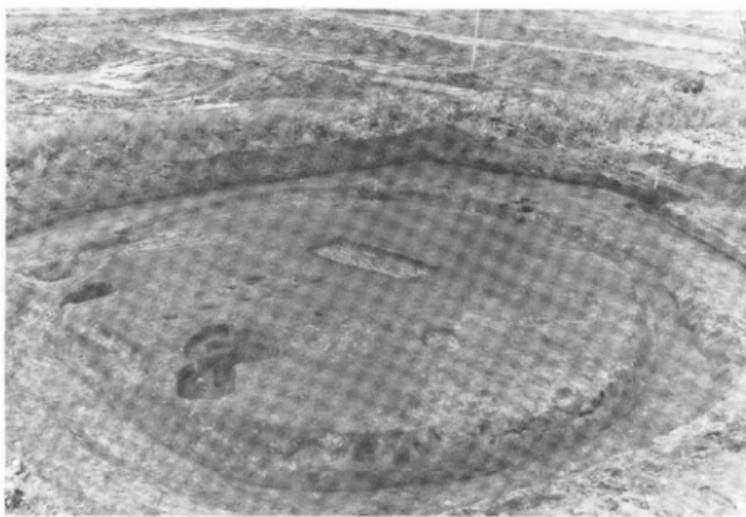
作　業　員：岩見一郎、岩成熊治、池本光子、井田春野、木下すみ江、岸田美智子、池本初子、井田たつ子、浦林はる江

事務担当：竹尾雅詮（船岡町教育委員会）、山本正子

調査協力：船岡町産業課



牧野古墳発掘前（東方より）



牧野古墳発掘後（南方より）

目 次

第Ⅰ章 船岡町の歴史的概要	1
第Ⅱ章 遺跡附近の自然環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	8
遺物一覧表	24
遺物実測図	28
あとがき	38



第Ⅰ章 船岡町の歴史的概要

和名抄（承平年間 931～937）に八上郡大江郷と出て来る船岡は、大江郷と佐尉郷に、隼は、日下部郷に含まれていたのであろう。又仁寿元年（851）大江神社、塙上神社に從五位下が継けられている。貞觀元年（859）大江氏雄が大江神社を再建している。

中世の頃、水口奥に大江谷地頭の伊田氏（後に国侍）が半柵城を築き大江谷と船岡、隼の一部を配下におく、又隼に波多野氏（日下部、安井、大門、隼）が福井部落南に高平城を築き隼も配下にあった。この両氏の間には合戦した記録も口碑もないが延文5年（1360）上護職山名時氏、師氏について伊田氏、波多野氏は將軍義詮に叛き京に攻上っている（敗走）応仁の乱の時には、国侍伊田、波多野両氏は山名氏について京に攻上り11年戦乱に明くる。秀吉が播磨より因幡に攻入ったさい半柵城主伊田氏は秀吉のため陥り丹波に走るこの時、下町観音堂、小岩寺、法念寺、幸賀ノ宮、大臣神社、野々宮神社等焼打に合う。

近世になって、池田光政の臣（家老？）丹波山城守が丸山に城を築き船岡を統治する。この頃八東郡の年貢その他の生産物運搬の為に舟川を作る（才代中村家初代開鑿）。又、交通の要所として船岡は栄え年2回の市もたつようになる。寛永9年（1632）国替となり池田光仲の家老乾氏の知行所となり栄える。（船岡には牢屋、御制礼所もあった）船岡（字船岡新部荘谷）には、6代～11代までの乾氏の墓がある。

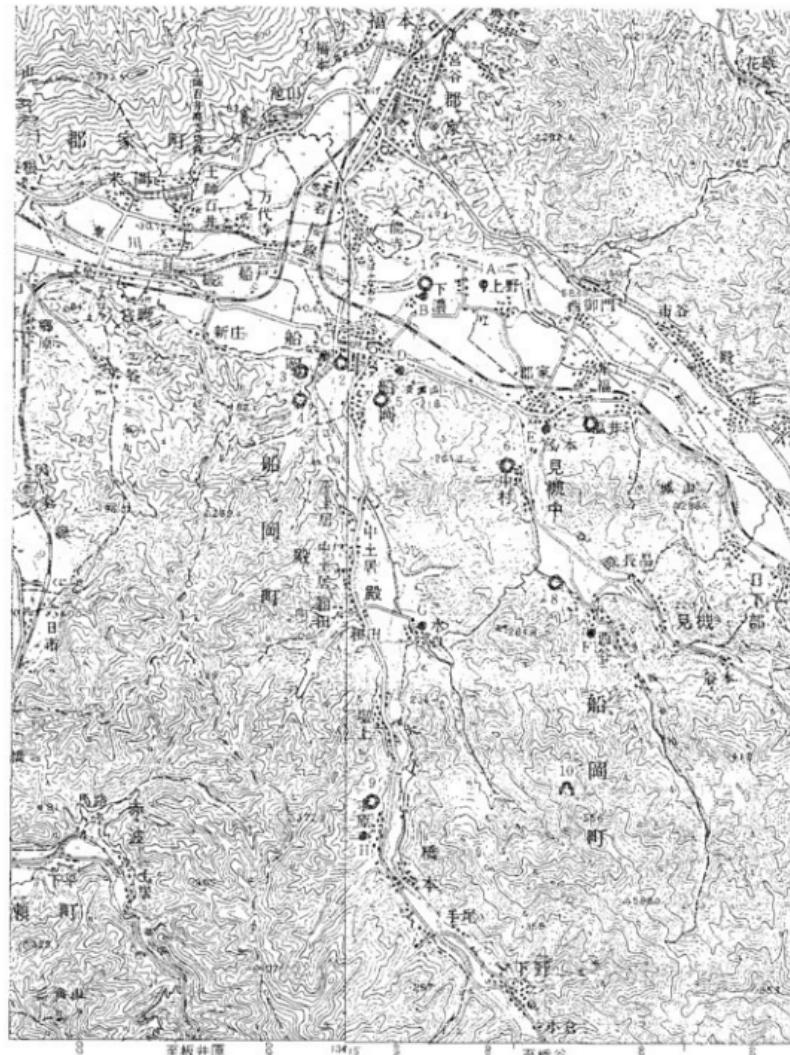
近代になって、伊井田村、大江村（大正7年合併して大伊村）船岡村、隼村となる。昭和27年、大伊・船岡・隼・各村合併（昭和25年11,6,581人、30年 6,591人）して船岡町となり今に至る。
(55年3月現在 5,091人)

1 梨ノ木古墳（下濃字梨ノ木）

現状は果樹園になっているため墳丘、石棺共破壊されていて現存しないが、地主の話によると、地下約1mの所より平な川石を利用して南北に約2m程走り巾40cm程の石棺と思われる様な造構があった。石棺内には川砂が入れてあった。大井石は5～60cm×1.2m程度のもの数個、その他石室と思われる所より須恵器、土師器多数。（6世紀頃のものと思われる、現存する須恵器3点は町中央公民館に保存する）金環3個の出上があったが現存しない。隣接地に、「奈免羅」と云う所があるがここも須恵器、土師器の散布地である。

2 下荒神古墳（坂田字奥ノ土居）

猛宗竹におおわれているが、上部に盗掘の跡がある、墳丘の下部に荒神様があり、土師質の土器片が散在する。墳形は「方墳」であり、29m×22mで町内では一番大きな古墳である。町誌によれば、大正の頃盗掘されたが、その時、鏡・刀・土器等が出土したが今では不明である。石室は、川石で崖を作り1m程度の高さであった。蓋石は附近の人が石橋に使っていたが今は不明である。



- | | | | | | |
|---------|---------|------------|-----------|----------|----------|
| ① 梶ノ木古墳 | ⑤ 大平谷古墳 | ⑨ 楠本遺跡 | (○) 下船岡神社 | (●) 丹神社 | (○) 水口神社 |
| ② 下荒神古墳 | ⑥ 畠塙古墳 | ⑩ 半堀城址 | (○) 上船岡神社 | (●) 西谷神社 | (○) 大江神社 |
| ③ 丸山遺跡 | ⑦ 楠井古墳 | (△) 田野ヶ宮神社 | (○) 下野神社 | | |
| ④ 神羽古墳 | ⑧ 牧野遺跡 | (○) 楠木遺跡 | | | |

注一 ○は遺跡を示し、●は神社を示す。
注二 國土地理院発行 1:50,000地形図「鳥取南部」

「若桜」図幅より抜粋。

插圖-1 船岡町遺跡分布図

3 丸山遺跡（船岡字丸山）

須恵器・土師器の散布地で、土師器には糸切底じきのもの又、杯の小片など丸山を中心として、東平、北平、北西平の畠に散布している。又昭和54年町保育所建設中敷地内より円筒埴輪破片が多数発見され町中央公民館に保管している。（55年度調査予定）

4 神明古墳（坂田字神明）

山道のために墳丘の裾が平になっているが墳形は円墳である。全長11.5m、高さ上部で20cm、下部で1.8mである。この墳基下方の志保谷道で、大形の瓶と思われる須恵器片を採集中央公民館に保存している。又附近の畠より小数の土師器片の散布を認める。

5 大谷平古墳（坂田字大谷平）

封土の半分を失いながら遺存している。石室上の封土は取り除かれており天井石の一部が露出している。墳形は円墳で、全長12.5m、高さ、上部30cm、下部180cm、石室は南北に作られており長さ、220cm、巾153cm、高さ150cm、石棺は55cm×173cm×40cmである。内部構造は墳丘中央にあり横穴式石室（片袖）で南に開口、出土品は、直刀1、長さ60cm、柄8.8cm、刃巾3.7cm、刀子1、長さ9cm、鉄鎌13ヶ以上、長さ13.2cm、須恵器（高壺、壺、壺、提瓶ほか）その他不明鉄器あり、船岡小学校に保管している。7世紀前半の墳の築造と推定される。

6 粟坪古墳（見櫻中字粟坪）

露出して石が現われている墳形は円墳である。字屋敷旧からも水田耕作中に須恵器片等を発見している。又附近の畠から土師質の壺の一部と思われる小片等も発見されている。

7 福井古墳（福井字西岡）

現状はヒノ木の25年生におおわれているが墳形は円墳か方墳で墳丘のすぐ下（北側）に舟川が通っている。（昔高瀬舟が通った枝川）全長12m、高さ1.5m

8 牧野遺跡（西谷字牧野）

今回の発掘調査の所である。現場はゆるやかな斜面を切開いた畠地に遺物が多数散布している。西側の堤の工事の時にも土器が出土している。昭和51年調査の時すでに、複合口縁を持った古式土師器の壺片、柳描文土師器片等を採集しており（町教委保管）、生活に適した場所でもあり住居跡の存在が予想される。尚、昭和55年度より、遺跡を含む付近一帯が、総合整備事業予定区域となった為、今回の調査が必要となった。

9 橋本遺跡（橋本字宮ノ下）

果樹園開墾中園内の中腹の小段地より壺出土、中世の墳墓かと思われるが断定は出来ぬ。出土地は表土に河原石を敷いていた。胎土は、砂まじり固い焼成表面、赤褐色、内面青灰色、底部に穴がある。壺高32.5cm、径30cm、底部径16cm、（橋本、大谷具己氏保管）古備前焼に類似しているが鐵骨器で墳墓ではないかと考えられる。又大江神社鳥居下手の畠中で古備前焼の破片が少々散在する。

大江神社々務所西側で、明治2年、土蔵建設の為上を平にしていた時土中より梵鐘出土。

梵鐘銘

因州小畠郷緑御宮堆鐘也

康正三年天正丑十月九日

大願主 北村宗次

用瀬地下金星

大工 藤原重家

現在は町内多宝寺に保管されているが古鐘としては県下でも有名である。

10 半柵城址（水口字滝ノ奥）

水口奥山で 550m の頂上にあり、大江谷の地頭伊田氏の廻城である。東側には馬かくしと云う地名も残っている。又尾根伝いに出城である鉢伏城、轆ヶ谷城へと続いている。松毛城、丸瀬城等多くの出城をもつ大城である因幡誌によると北西が表である。

第Ⅱ章 遺跡附近の自然環境

八東川支流、見櫻川の左岸に位置する牧野丘陵は、千代川河口より約24km、海拔90～110mの所にあり、見櫻川との比高は約10m、丘陵下位の谷底平野とは約2～3mの比高をもって明瞭に区分される。

牧野丘陵の基盤は凝灰角礫岩であり、この上部の厚さ130～150cmは赤色風化を受けている。この基盤岩の上位には、層厚約4mで大山降下火山灰が被覆している。

また、この丘陵には二条の埋積谷があり、C・D・I・Hトレンチをいた東側の埋積谷には二層の黒褐色腐植質土層を見る。Fトレンチ東方で畑地断面を見ると、上位のものの上限は表層から10cmにあり層厚7cm、色調5YR 3/4～3/4であり、下位のそれは表層から32cmに上限があり、層厚約24cm、色調7.5YR 3/4～3/4を示す。構成物は表層から下層まで同質であり、粘土（ローム）と小～中亞角礫より成っている。

この埋積谷での遺物包含層は、上位の黒褐色腐植質土層であり、古いものとしては、H・Iトレンチで弥生後期から末期と考えられる土器片が出土している。また、A・Bトレンチのある埋積谷では、現在より小型と考えられる成牛の歯が出土している。

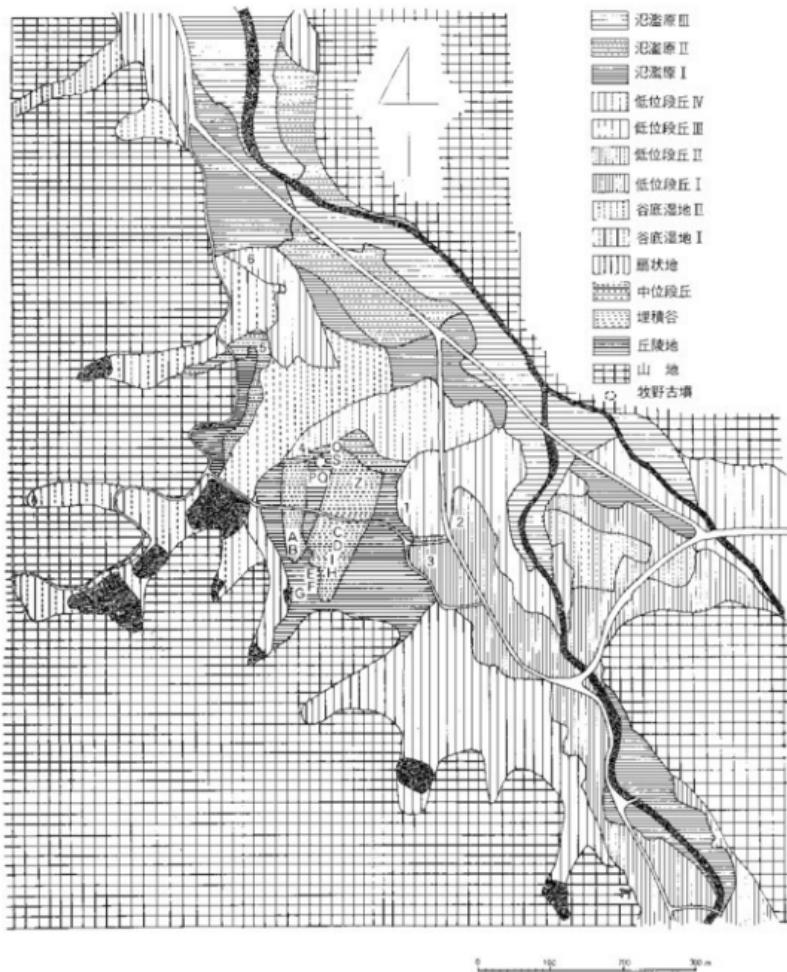
以上の事からこの丘陵の埋積谷が安定した時期は、遅くとも弥生後期頃と考え事ができる。従って、牧野丘陵は弥生後期以後の人類にとって居住に適した地域であったと考えられる。

丘陵下位の谷底平野では、微地形分類図の地点番号1～5で6～7世紀の須恵器片を、ほ場整備の為の表土除去後、水田の床土の層相より確認しており、地点6のところでは、杉の埋木を確認している。埋れ木は10数本の立木と思われ、層相は2m以上ある泥炭であった。この泥炭層の上位には層厚約2mのローム・角礫層（二次堆積物）があり、その上位は水田となっていた。

従って、古墳時代後期には居住地域は牧野丘陵のみならず、下位の谷底平野のなかの泥沼ではない所も居住していたものと考えられる。そうした中で、7世紀初めの築造として考えられる牧野古墳の立地を見ると、古墳時代後期から末期には、その居住空間の中心は丘陵下位の谷底平野であつたかも知れぬ。そして、弥生時代後期から末期のものと考えるFトレンチの土壤墓表層より出土した須恵器の壹の意味するものも、古墳時代後～末期の居住地としてより、聖域としての性格の方が強かったのではないかろうか。

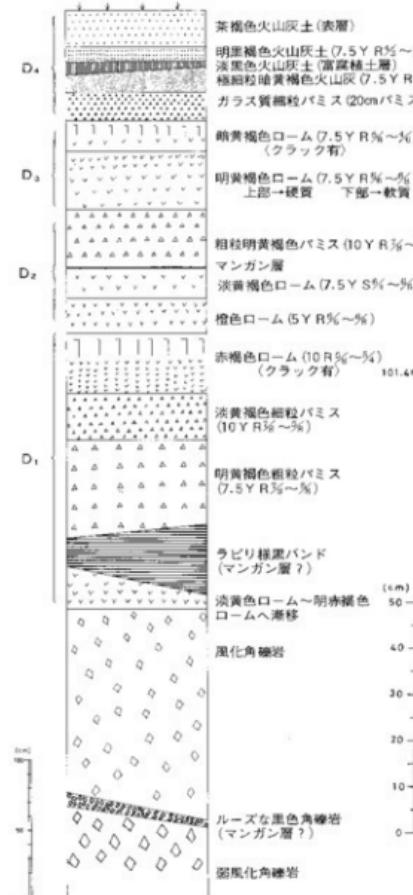
また、A・Bトレンチで出土した中世の土鍋により、不明確ながら、居住地の移動を見る事が出来る。つまり丘陵・埋積谷（弥生後～末期）から谷底平野（古墳時代後期）へ、そして中世に丘陵地域へ。

狭少な地域の、小規模な調査により推論する事は危険ではあるが、ほ場整備事業の波の中で後世に伝える為、敢えて記述しておきます。



注) 図中のアルファベットはトレーナーの位置を示し、数字は遺物散布地を示す。

插図-2 牧野丘陵周辺微地形分類図



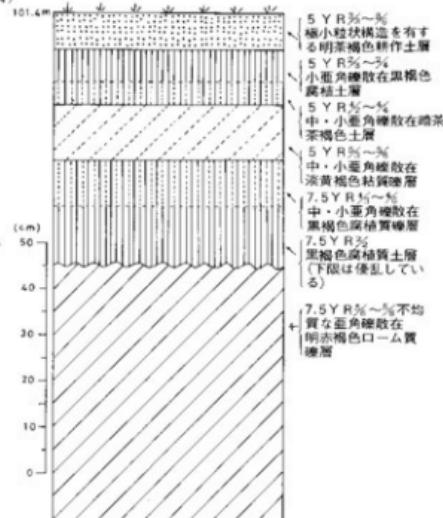
插図-3 牧野丘陵表面地質柱状図

注-1 色調については新版・標準土色帖(1967)：小山正忠・竹原秀雄編著を使用した。

注-2 書を使用した。
 D. 一大山上部火山灰
 D. 一大山中部火山灰
 D. 一大山下部火山灰
 D. 一大山最下部火山灰

表示才

注) 全層相に粘性があり、ロームと角礫岩を主としている。丘陵の埋積谷構成層である。



插図-4 牧野丘陵 E トレンチ東方細地盤断面図

第Ⅲ章 調査の概要

当初のトレンチ設定は牧野丘陵にある二条の埋積谷のうち、東側のものが中心に設定されたが、その後、地元の人の情報により西側の埋積谷、そして二条の埋積谷の間の微高地を設定した。

A・Bトレンチ（挿図一8・9を参照）

住居址を暗示するピット様遺構を確認したが、不充分ながら埋戻しと決定した。

遺物は土鍋3、壺又甕9、平底型土器片4、等であったが、完形品はなく破片ばかりであった。

C・Dトレンチ（挿図一10・11・12・13・16を参照）

計測可能な遺物はC₁、C₂トレンチで出土した壺、甕の二点であり、その他の破片も少数しか出土しなかった。

遺構らしきものは発見できない。

H・Iトレンチ（挿図一14・15・16を参照）

遺構は未発見なれど、Hトレンチ西隅に現われた巨石の解釈は、巨石の少ない丘陵地であるだけに注意を要する。

遺物は多数出土したが、主に土師器片であり、少數の須恵器片と弥生土器片が出土している。又、石刃、砥石、ミニ石斧各1点がある。

Eトレンチ（挿図一17・18を参照）

遺物は皆無。遺構として土壤状のものがあるが、詳細不明。このトレンチの表土は薄く遺構の土質も角礫岩であり、時期等不明。

Fトレンチ（挿図一17・19を参照）

西半部は基盤岩の丘陵頂部、東半部は埋積谷であった。この中央付近に土壤墓があり遺構内の土質は黒褐色を呈するが、基盤岩と同質の角礫岩であった。内部より平底型土器が出土し、土壤直上には須恵器壺が出土した。弥生土器と考える平底型土器片と、7世紀前期と考える須恵器壺との相関が問題となる。

東半部の埋積谷からも土器片が出土したが計測不能。

Gトレンチ（挿図一17を参照）

表土は、10~15cmとE・Fトレンチと同質であり、直ぐに基盤岩となる。

遺構、遺物は皆無。

O・Sトレンチ（挿図一22を参照）

ピット状遺構を確認するが、遺物は未発見であった。又、Oトレンチの西隅とSトレンチの東部で土壤状遺構を認めたが、遺物が皆無の為、不明確。

Pトレンチ（挿図一20を参照）

平板実測図内の(1)(2)はローム層を掘り込んで、ローム質角礫岩が充填し、深さは表層から約150

cmであった。(3)は焼土であり、全体として遺物は皆無に等しい。

Qトレンチ（挿図—20・21を参照）

平面実測図内の(1)から刀子が出土したが遺構とは考え難い。(2)は焼土、(3)は供獻用の須恵器片であり完形品であった。(4)は土壙墓。その他の遺物は皆無。

牧野古墳（R・Tトレンチ）

Rトレンチ試掘時、遺物壺（40）、高壺（44）が出土し、その両端に落ち込みを確認した。そこで、その南方約1mにTトレンチを設定し落ち込みの性格を追求したところ、Rトレンチの落ち込みに連続する弧状の黒褐色腐植土層が、地表下15~20cmで大山上部火山灰層の20cmバミスを切って現われた。これを円墳の周溝であると断定し、仮称、牧野古墳とした。

Tトレンチ東半部周溝上での遺物は壺（41）、壺（42）そして計測不能な須恵器片、土師器片が数点であった。その他の地点よりの出土として遺物高壺型土器（43）があるが、古墳全体として見た場合、円墳の周溝南北、特にTトレンチよりの遺物数が著しく多かった。その為、周溝に副葬品を入れる際には、主体部の南方に相当する所に入れたものと考えられる。

円墳主体部の長軸は、磁北より西に約34°傾いており、長さ3m、幅1.5mの長方形をしていた。この主体部の遺物として、遺物壺蓋（38）、壺（39）、鉄鏡（61）、尖頭器型石器（58）の4点がある。遺物38・39の土器は黄橙色を呈してはいるが、焼成の悪い須恵器と考えられ、塑形作製の手法として「五~六段の右回り粘土紐巻きあげ」の手法が取られており、型式的にも7世紀初期のものと考える。

遺物61は、身厚3mmの有茎二翼の鉄鏡であり、実用品と云うよりも宝器的性格のものと思う。遺物58の石器は、片面が自然円磨の状態で、他面は第一次剥離の尖頭器型をしている。この為、石室あるいは石棺の一部分とは考え難く、またそれを示す根跡も見当らなかったので、組み合わせ式又は竹釘を使用した木棺であったか、直葬したものと考える。

主体部の深さは、南端部で地表下35cm、北端部で30cmが残されており、表土削除後（主体部を確認した時）には底の10cmだけを残す状態であった。この主体部は20cmバミスの上半約10cmを切り込んでその床面としていたが、P・Qトレンチ等、周囲の地層から見て、20cmバミスの上位にくる円墳築造時の地層の厚さを推定すると、多くとも50cm以下であったと思われる。従って、円墳主体部は、当時の地表より60cm以下の深さに掘り込まれ、その上に盛土がなされて埋葬されたものと判断する。（挿図—5・6を参照）

円墳の規模は、南北内径10.7m、南北外径13.5m、東西内径10.4m、東西外径13.0mであり略真円に近い。周溝最大幅は160cm（この数値は20cmバミス直上での幅であり、円墳築造時の幅はこれよりも広い）、周溝最少幅110cmを測る。また、周溝の深い所で44cm（南部）、浅い所で20cm（北部）を測るが、築造時の周溝の深さは、南部で約90cm、北部で約70cmであったと推定する。この円墳自体が緩やかに北に傾く丘陵地を利用しているが、周溝底も同様に南半部が少し高く、北

半部が低くなるように掘り上げられているので排水についての考慮がなされていると云える。周溝の側壁は弱い凸面の急斜面であり底幅は45~70cmの平面をなすが、全体としては底の平らなU字型をした周溝断面である。(挿図-23・24を参照)

その他の遺構として、平板実測図の中に示した(1)(2)(3)(5)(6)(II)のピット状遺構があるが、これらの中からの出土遺物は見られなかった。只、これらピット状遺構が円墳周溝を切っている事より円墳築造以後に形成されたものと考える。そして(4)より出土した木棺墓が(3)のピット状遺構を切っている。従って(1)(2)(3)(4)(5)(6)(II)の遺構が直接的に円墳と関係あるとは考え難い。しかし(II)の焼土(130×60×40cm)については、主体部出土の焼成の悪い木、环蓋との相関を考える必要があり、又、黒点で示した20×30×30cmの富腐植土穴も、その配列状況から要注意の遺構である。

次いで、平板実測図の中に示した(4)地点より出土の木棺墓について、現在判る範囲を記述しておく。

木棺墓出土地点は、RトレンチとTトレンチとの間に当たった為に円墳本発掘中に出土するまで予期できなかった。木棺墓と断定したのは鉄角釘が出土したからであり、この角釘は上・中・下・最下の四層準に分かれて出土した。その出土状況及び地層断面より、木棺の大きさは長さ約70cm、幅約55cm、高さ約85cm前後と考えられた。(挿図-25を参照)

角釘は上段より5本、中段より7本、下段より10本、最下段より17本(1本を2本分に数えている可能性がある)が出土し、各段より比較的保存の良いものを1本づつ選び実測した。最長釘の長さは7.5cmを測り、その断面は長方形であるが、釘頭が梢円形をしており船釘と同様の特徴をもっている。また、保存の良い釘に限って釘の上半部が曲がっている事も特色である。この他に木棺が二重になっていたとも考えられる位置からも、2本の釘が出土したが、副葬品はなく、木棺木材の厚さ・材質も不明である。

遺骨は頭骨と1本の鎖骨は判断したが、その他の骨については浅学の為に不明である。

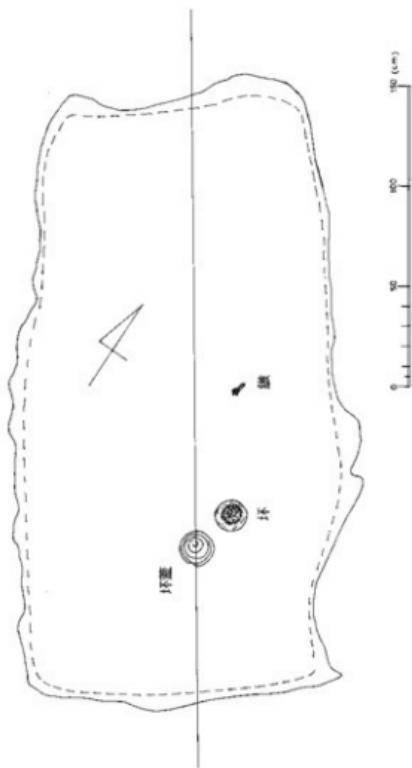
頭骨の保存状態は比較的良好であり、可能な限り実測を敢行した。単位-mmの実測なので誤差も大きいと思うが、その特徴として、頭の型は長頭型、顔の型はコルマン示数より高上顎型、ウイルヒヨウ示数より広上顎型に属し歯槽側面角より突顎であったと考える。歯並びは非常に良く、左上顎骨で1~8番までの歯を全て確認できる。左下第一大臼歯が抜けてはいるものの、歯の磨り減り方は少なく、咬み合わせは鉄状である。(挿図-26を参照)

右顎面は、木棺底に接していたため保存状態が悪かった。歯・骨とともにその断面は食パンの断面の如く間隙が出来ており、色調も食パンのようであった。埋葬位置が円墳周溝の内側に接する位置にあった事、大山上・中部火山灰を掘り込んで埋葬していた事により地下水の影響が少なかつた事が、この木棺墓の保存を良好にしていたものと判断する。

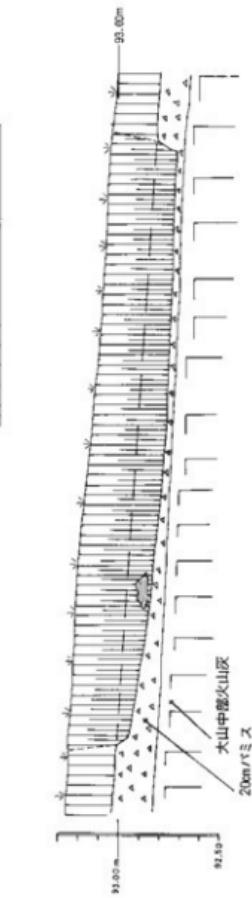
ともあれ、この木棺墓の埋葬時期は、円墳築造後に形成されたピット状遺構よりも新規のものであり、埋葬方法は屈葬、そして、被葬者は第三大臼歯(親知らず)がある事と歯の磨耗が少な

い事により青年であろうと推定される。

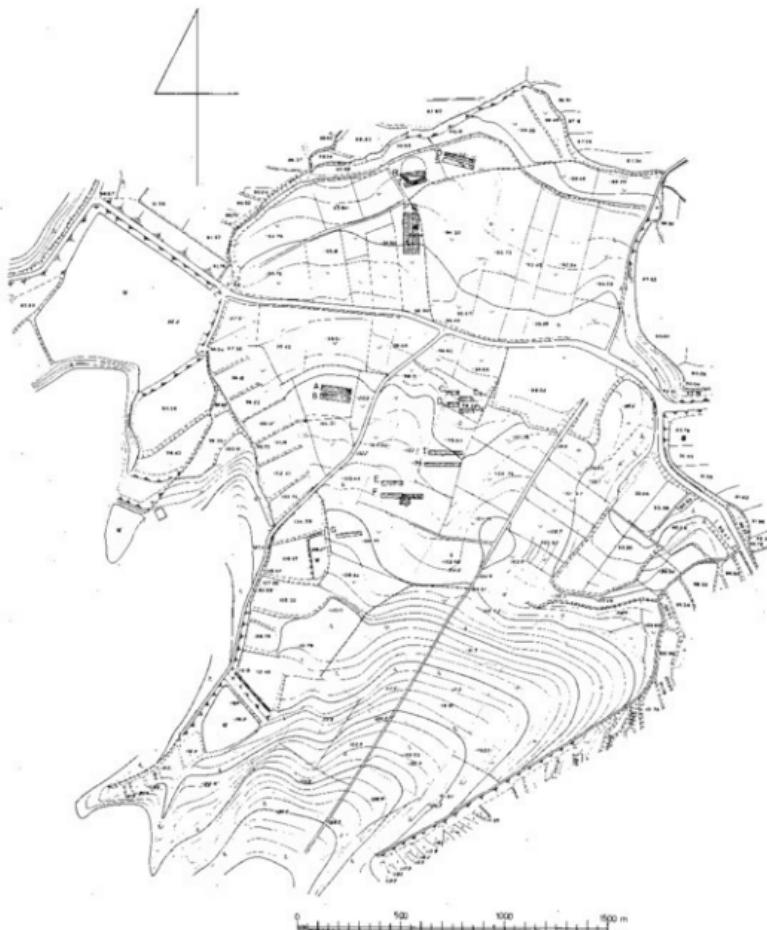
以上、牧野古墳は大山降下火山灰によって被覆される、日向斜面の牧野丘陵綫部末端に立地し、下位の谷底平野を瞰観するに最適の条件と遺物保存に適した環境の地に位置している。ゆえに牧野古墳を築造した人々の居住空間は丘陵下位の谷底平野であったとも考えられる。



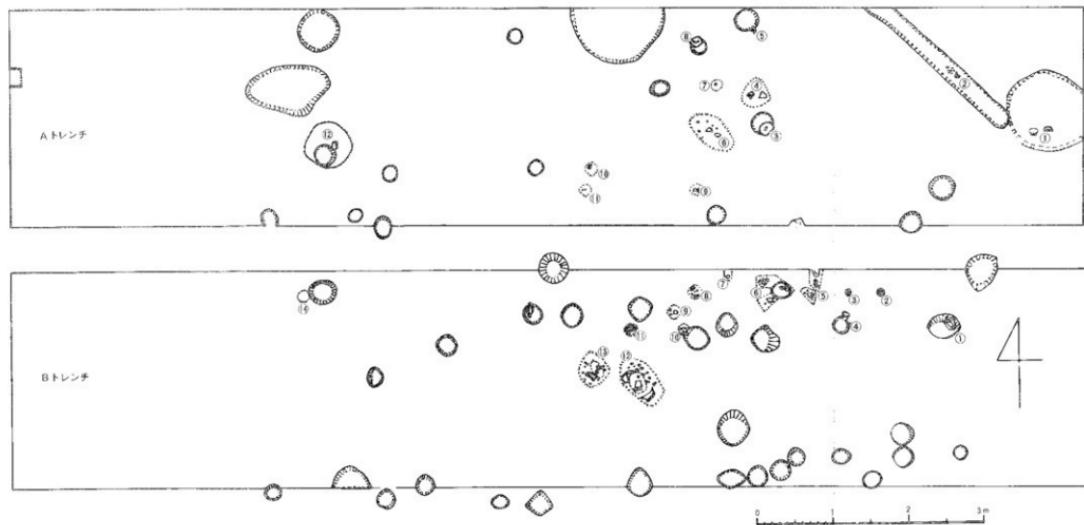
挿図-5 円墳主体部遺物出土状況図



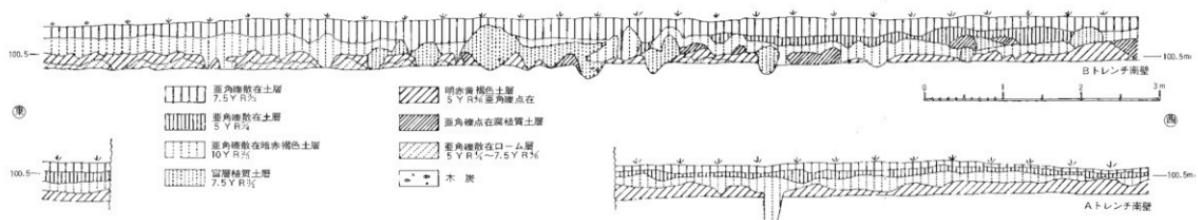
挿図-6 円墳主体部南北地層断面図



挿図一七 牧野遺跡トレンチ分布図



插図-8 A・Bトレーンチ柱穴状構造分布図



插図-9 A・Bトレーンチ地層断面図



插図-10 C. レンチ南壁地層断面図



插図-12 D. レンチ南壁地層断面図



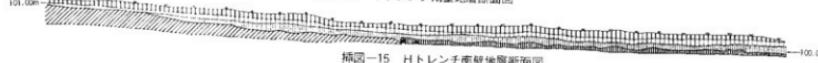
插図-11 Cz レンチ南壁地層断面図



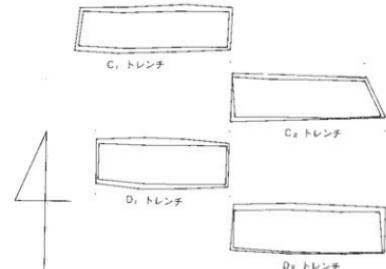
插図-13 Dz レンチ南壁地層断面図



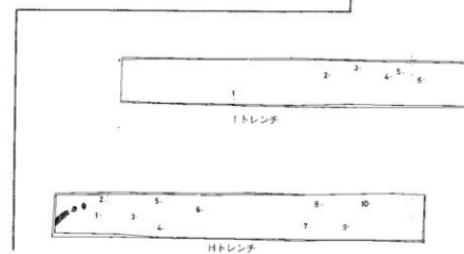
插図-14 I レンチ南壁地層断面図

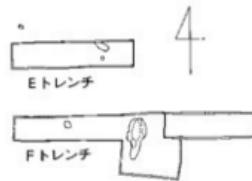


插図-15 H レンチ南壁地層断面図

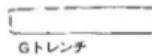


插図-16 C・D・I・H レンチ分布図

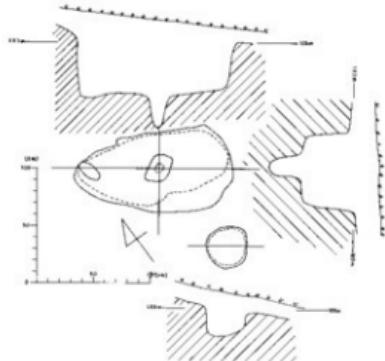




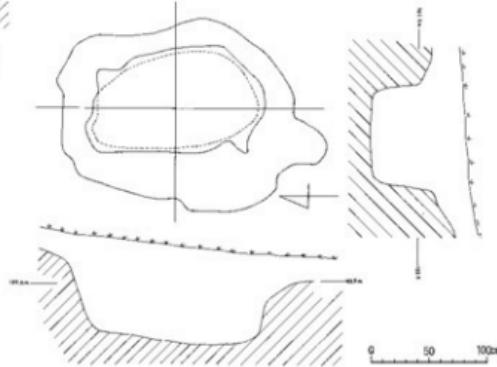
1 2 3 4 5 m



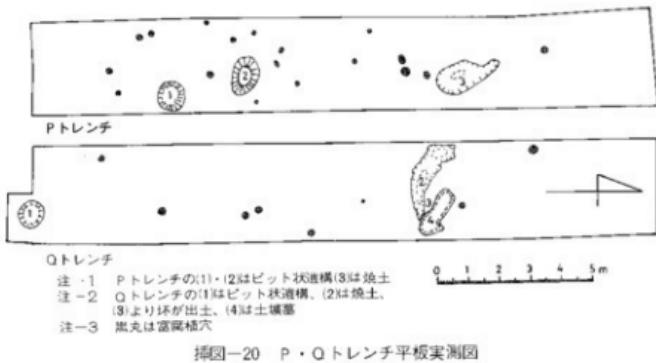
挿図-17 E・F・G トレンチ平板実測図



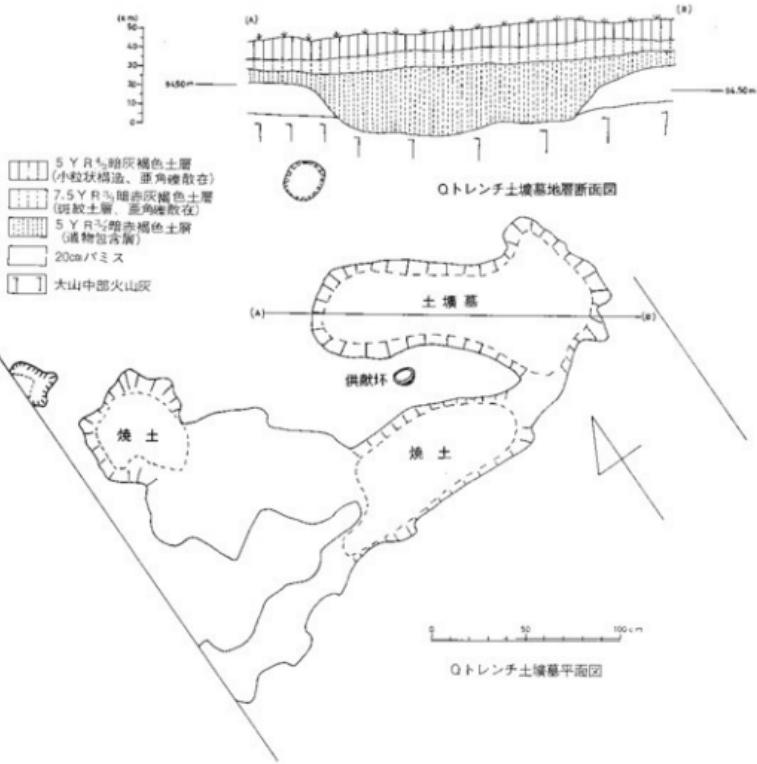
挿図-18 E トレンチ土壤状造構



挿図-19 F トレンチ土壤墓実測図



挿図-20 P・Q トレーナー平板実測図



挿図-21 Qトレントチ土壤基実測図

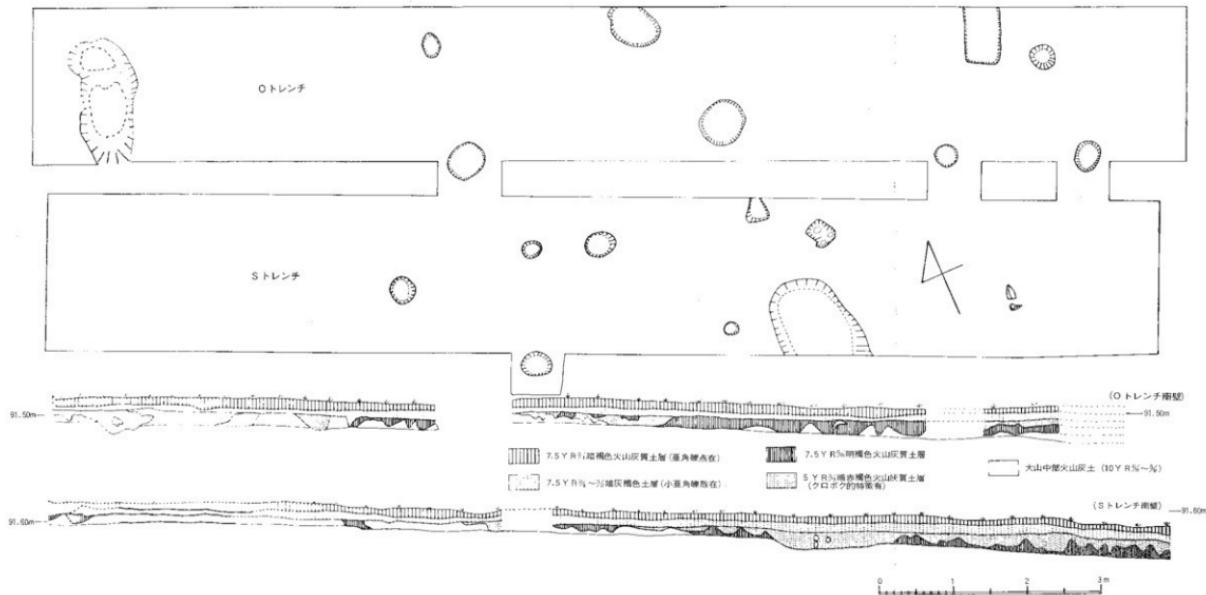


図-22 O・S トレンチ平面実測及び地層断面図

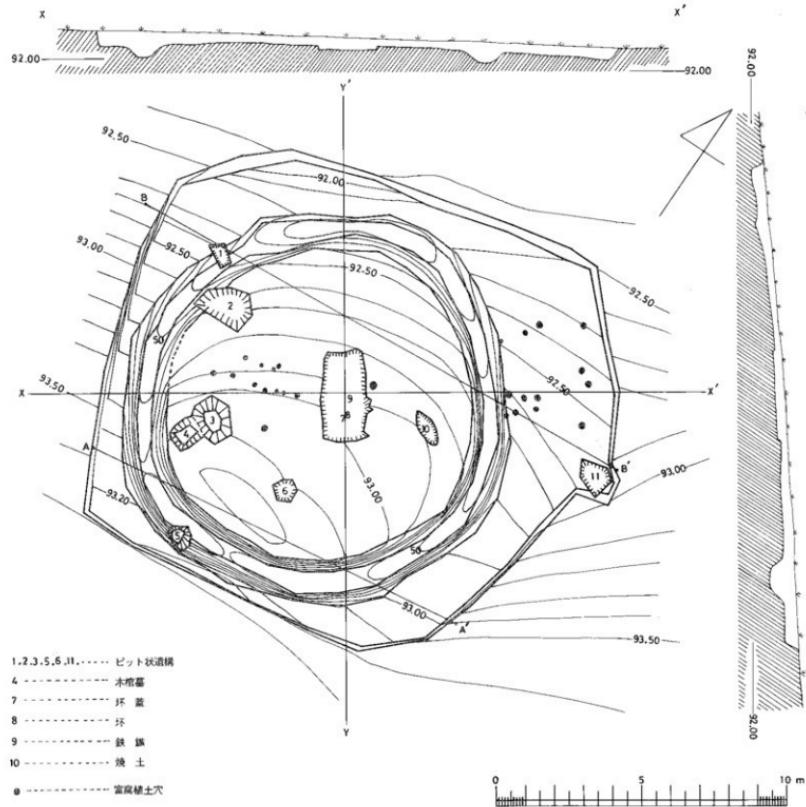


図23 牧野古墳平板実測図

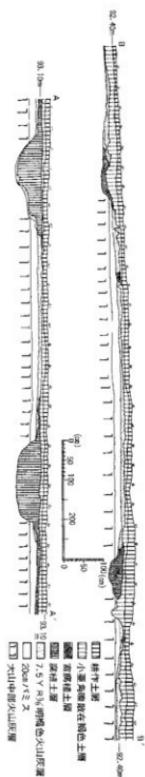
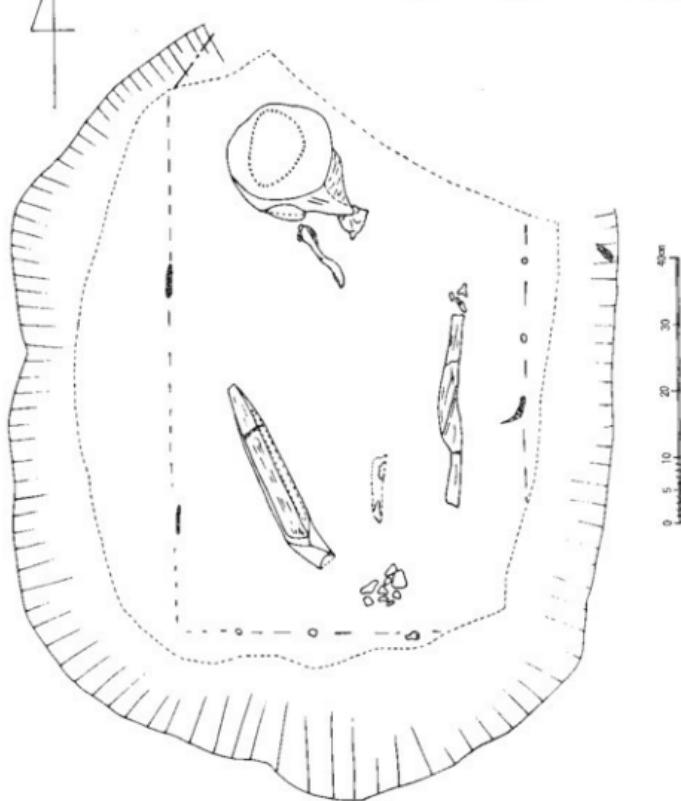
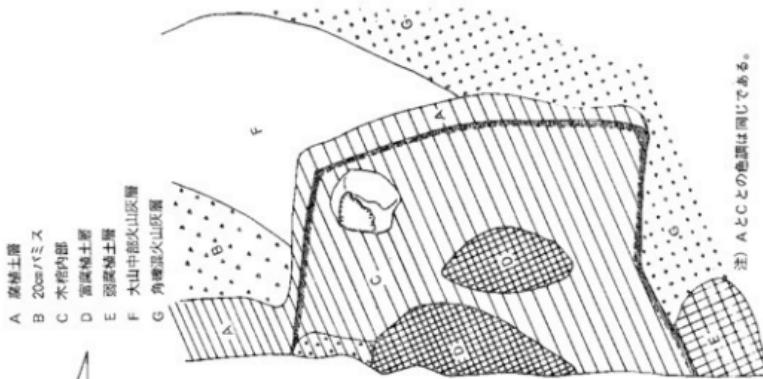


図24 牧野古墳東西地層断面図

木棺北側壁土層断面図

注) AとCとの色調は同じである。



挿図-25 人骨出土状況実測及び土層断面図

〈遺物一覧表〉

(土器類)

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
1	壺	によい橙	織 疎 小穂点在	硬質	やや 口縁部 外直径 28.6	「く」の字に外反する 口頭部。 肩が少し張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面上半凹き目。 内面上半ヨコ・クシメ 調整。。	Aトレンチ内東部中央 -30cm No.1
2	壺又甕	によい橙	織 粗砂点在	硬質	やや 口縁部 外直径 16.4	複合口縁で「く」の字 に外反する口頭部。	口縁部内外面ヨコナデ。 肩部外面ヨコナデ。 肩部内面ヘラケズリ。	Aトレンチ内 No.2-1
3	壺又甕	淡黄 橙	織 疎 小穂点在 粗砂点在	硬質	やや 口縁部 外直径 10.0	「く」の字に外反する 口頭部。	口縁部外面ヨコナデ。 口縁部内面不規なれど タテナデ?	A-Bトレンチ間 No.18-3
4	壺又甕	橙	織 疎 小穂散在 粗砂散在	硬質	やや 口縁部 外直径 40.0	内湾ぎみ「く」の字の 口縁と直立ぎみの頭部。 口縁上端が凹面をなす。	口縁端部を外方へ少し つまみ出し、口縁上端 と外端に凹面を出す。 内外面ともヨコナデ。	Aトレンチ内東部 -30cm No.14-2
5	平底型 土器	橙～ によい橙	織 粗砂点在	硬質	底部外 直 径 9.2	ゆるやかに立ち上がる。	外面下半部タテナデ。 内面下半部タテナデ。	Aトレンチ内東部 -30cm No.14-1
6	平底型 土器	によい橙	織 疎 粗砂散在	硬質	底部外 直 径 6.0	一塊立ち上がって広が る。	外面下半部ヨコナデ。 内面下半部タテナデ。	Aトレンチ 表面にスス沈着 No.4-2
7	土 鍋	灰白～ 黒 握	織 粗砂散在	硬質	やや 口縁部 外直径 27.6	内湾ぎみ「く」の字の 口縁と「く」の字の頭 部により段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 外面にスス沈着 (川砂を使用したと思 われる) No.5-1
8	土 鍋	によい 黄 橙	織 粗砂散在	硬質	やや 口縁部 外直径 27.6	口縁部を内寄させ段を つくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 7番の一帯とも考えら れるが、口縁部に若干 の差を認める。 No.5-1-2
9	土 鍋	灰 白	織 粗砂散在	硬質	やや 口縁部 外直径 30.6	口縁部を内寄し、頭部を 「く」の字にさせ口頭部 内面に段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ No.5-1-3
10	甕又羽 釜	橙～明橙	織 疎 粗砂散在	硬質	口縁部 外直径 25.8	内寄する口頭部、そし て肩部を外方へつまみ 出し、外面に段をつく る。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ内東部 -30cm
11	高环	黄 橙	織 粗砂点在	硬質	脚部外 直 径 17.2	「八」の字に聞く高环 脚部。 端面に3条の凹縫文。	握部(外面)ヘラタデ。 端部内外面ハケメ、ヨ コナデ。	Bトレンチ内-36cm 東壁より500cm、南壁 南壁より110cm No.1
12	壺又釜	淡赤 橙	織 疎 粗砂散在	硬質	脚部外 直 径 38.0	「く」の字に外反する 口頭部。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 土壤から知れぬが昔傳 のあとが見られぬ。 No.3-1
13	壺	明黄 握	織 疎 粗砂点在	硬質	口縁端 部外外 直 径 15.2	直立する頭部に外反す る口縁、 口縁端部を上方へつま み出す。	口縁端部に2条の凹縫 文。 内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ中央部 -35cm

番号	器種	色調	胎土	焼成	法尺cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
14	壺	にぶい程	鐵 密 粗砂点在	硬質	口縁部 外直径 14.8	「く」の字に外反する 口縁部口縁端部肥厚	口縁端部に1又は2条の 沈線。 口縁部内外面ともヨコナデ。 肩部内面に右斜クシメ。	A・Bトレント付近表 探 444-1番地
15	壺又 高环	にぶい程	鐵 密 粗砂点在	硬質	口縁部 外直径 12.8	直立ぎみに外反する口 縁部。 口縁、下端を向外へつ まみ出す。	口縁部に5又は6条の 沈線。 内外面ともヨコナデ。	Bトレント内東部 -30cm
16	平底型 土器	にぶい程 -程	鐵 密 -	やや 硬質	底部外 直 径 5.8	一端立ち上がって広が る。 底面が上方へ屈曲する。	外腹下半部ヨコナデ。 内面不明(底面の厚さ が薄い)	Bトレント 雲母散在、他に石英粒 角閃石点在。 No.12-1
17	平底型 土器	明 程	鐵 密 小礫点在	やや 硬質	底部外 直 径 11.0	ゆるやかに立ち上がる	内外面ともヨコナデ。	Bトレント中央部 -30cm
18	壺	灰 黄	鐵 密 中砂点在	硬質	脚 外 直 径 14.3	脚と底との間に幅13mm の凹面がある。	内外面ともヨコナデ。	C:トレント中央部
19	壺又壺	にぶい 黄	鐵 密 粗砂点在	やや 硬質	口縁部 外直径 25.0	「く」の字に外反する 口頭部 口縁端部肥厚。	口縁外面クシメを散ら す、後ヨコナデ。 口縁部内面ヨコクシメ。	C:トレント東部 -65cm
20	壺	淡青灰	鐵 密 粗砂点在	硬質	頭部外 直 径 15.7	直立ぎみに外反する口 頭部と大きく張る肩部。	外腹背部に喉、脚部に 斜の椅子印目文後にヨ コハケメ仕上げ。	Fトレント -15cm (土壤墓と相關?) 西壁より930cm、北壁よ り100cm
21	壺又 高环	橙	鐵 密 小礫点在	硬質	端部外 直 径 12.3	不 明	外面淡丹彩の後ヘラミ ガキ。 内面ヘラケズリ	Fトレント -15cm (土壤墓出土) (A) (壺の口縁か、高环の 脚部)
22	壺又 高环	にぶい 程	鐵 密 小礫散在	やや 軟質	口縁部 外直径 15.7	不 明	内外面ハケメ、ヨコナ デ。	Fトレント土壤墓 (肩 の張る壺と考えた) 口上端を約945°内傾さ せて見るが適当。
23	平底型 土器	にぶい程 -程	鐵 密 粗砂点在	やや 硬質	底 外 直 径 8.3	直立ぎみに外反し、広 がる、うする底厚。	外面、丹彩。タテ、ヘ ラミガキ。 内面、タテヘラケズリ。	Fトレント土壤墓 -35cm 底、外面下半にスス沈 着。
24	平底型 土器	橙- 浅黄橙	鐵 密 小礫点在	やや 软質	底 外 直 径 6.1	外反ぎみに、ゆるやか に立上がる。	外面、タテヘラミガキ。 内面、ヘラケズリ、後 ハケメ。	Fトレント土壤墓 -15cm
25	平底型 土器	にぶい 赤	石英粒 点在	やや 硬質	底 外 直 径 4.9	一端立ち上がって広がる。	外面、丹彩、ヨコナデ ハケメ	Fトレント土壤墓(E)
26	高环型 土器	橙	鐵 密 粗砂点在	やや 硬質	口縁部 外直径 32.6	4個の円形浮文と3本 の縦長粘土紐の貼付。 口上端が平面となって いる。	内寄する環部上半に5 条の回線をめぐらし、 ハケメ仕上げ。 外面環部下半に丹彩ヘ ラミガキ。	Hトレント内西部 No.5-1
27	高环型 土器	暗 赤	粗砂散在	やや 软質	不 明	口上端が平面となっ て いる。 环部上半に4本の縦長 粘土紐貼付が認められ る。	外面、环部上半に5条 の回線。粘土紐を貼付 後ハケメ仕上げ。 内面、ハケメ、ヨコナ デ。	Hトレント No.11-1

番号	器種	色調	胎土	焼成	法算cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
28	壺又瓶	明黄橙	小繊散在 軟質	やや 外直径 15.7	口縁部外反する 直立する肩	弧状に外反する口縁部 強く張る肩	口縁部ヨコナデ、ハケ メ。 肩・胴部はクシメ文、 ハケメ仕上げ。	Hトレンチ中央部 -45cm
29	平底型 土器	にぶい 赤褐色	織 疎	やや 硬質	底 外 直 径 6.1	外反ぎみにゆるやかに 立上がる。 うすい底厚。	丹彩、ヨコ、ハケメの 外輪。 内面、ヨコナデ。	Hトレンチ中央部 -50cm (A)
30	平底型 土器	黄 橙	粗砂散在 硬質	やや 硬質	底 外 直 径 16.6	約60°の角度で立上がる。	外底面、ヘラケズリ。 内底面ヨコハケメ。	Hトレンチ中央部(B) -50cm 内面の調整が悪い。
31	壺	青 灰	織 密	硬質	脚 外 直 径 13.0	丸味のある脚を有する。 やや内寄ぎみに立上がる脚	外底面下半ヘラケズリ。 脚部ハケメ仕上げ。 内面ハケメ、ヨコナデ。	Hトレンチ中央部 -30cm (脚部下端に1条のヘ ラギ沈線) (C)
32	壺	青 灰	織 密	硬質	脚 外 直 径 10.2	丸ばった外反ぎみの貼 付けた脚	外底面ヘラヨコナデ、 ハケメ。	Hトレンチ -45cm 東壁より710cm、南壁よ り810cm (D)
33	高環型 土器	にぶい緑	織 密	やや 硬質	口縁部外直徑 16.4	肥厚した口縁端部。 ゆるやかな圓面の口上 端面。	口上端、内面ヘラミガ キ、ヨコナデ。 外面部上半クシメ後 ヨコナデ。	Iトレンチ No.1-10
34	环	青 灰	織 密 小繊点在	硬質	口縫外 直 径 15.7	内寄ぎみに直立する口 縫端部。	内外面ともハケメ、ヨ コナデ。側1cm前後の 粘土縫5~6段積みあ げ(巻きあげ?右回り)	Qトレンチ上端 東壁より1.05m、南壁 より12.91m
35	壺又瓶	橙	織 密	硬質	口縫部外直徑 15.4	口縫端部肥厚、口縫部 を外方へつまみ出し、 内側に段をつくる。	内外面ともヨコナデ、 ハケメ口縫下方にクシ メ文後丹彩	Pトレンチ内北部
36	壺	青	織 密 粗砂散在 硬質	不明	不 明	肥厚した口上端	内外面ヨコナデ	P・Qトレンチ南方査 探。
37	壺	にぶい 黄橙橙	織 密	やや 硬質	口縫下 端外径 13.6	外反ぎみの口縫部 (複合)	口縫部に5条のヘラガ キ沈線。 内外面ともヨコナデ、 ハケメ。	P・Qトレンチ南方査 探。
38	环	黄 橙	織 密 粗砂点在	軟質	口縫部 口 径 13.1	やや外反する口縫部と 胴部に3~4段の凹面。	口縫部はヨコナデ。 内面は密なヨコナデ、 ハケメ5~6段粘土縫 積みあげ(右回し巻きあげ?)	円墳主体部
39	环	黄 橙	織 密 粗砂点在	軟質	口縫部 直 径 15.0	全体を外反させながら 口上端を少し肥厚させ る。(口上端をつまみ 上げる)	内外面とも穢いヨコナ デ。5~6段の右回し 粘土縫巻きあげ。	円墳主体部
40	壺	にぶい橙	織 密 小繊点在	やや 硬質	口縫部外直徑 19.0	「く」の字に外反する 口頭部と直立ぎみに外 反する複合口縫部	口縫部上半にクシメ、 下半部はつまみ出しハ ケメ、ヨコナデ。 内面はヨコナデ。	Rトレンチ東部 (内墳周溝内)
41	壺	にぶい橙 -にぶい 橙	織 密 粗砂点在	やや 硬質	口縫部外直徑 18.8	「く」の字に外反する 口頭部と直立ぎみ口縫 部に2条のゆるい凹面	口縫部内外面ともヨコ ナデ。 頭部内面ヘラケズリ。	Tトレンチ東部-55cm (円墳周溝内)
42	壺	明 橙	織 密 粗砂散在	やや 軟質	口縫部外直徑 17.0	「く」の字に外反する 口頭部と内面口縫部に 凸面のない直立ぎみ外 反の複合口縫。	口縫部に10条(?)の ヨコ、クシガキ沈線。 内外面ともヨコナデ。	Tトレンチ中央部 -30cm (円墳周溝内)

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
43	高環型土器	明赤棕	緻密 粗砂点在	やや 硬質	口縁部 直 径 26.7	环部上半に5条の凹面 そして口上端の肥厚し た平面。	外面、ヨコナゲの後丹 影ヘラミガキ 内面环部上半ヨコナゲ	円墳埴表採 (脚付の跡とも思える)
44	高環	青灰	緻密	硬質	脚部凸 部 径 6.5	「八」の字に聞く高环 脚部	脚部上半に一对のスカ シと2条の凹。	Rトレンチ東部
45	壺や甕	明 橙	粗砂散在	やや 軟質	不不明	内側する口縁部と肥厚 口縁端部(口上端は平 面)	口縁端部に凹凸施し 跡、内外面ともヨコナ ゲ。	O Sトレンチ南東方 -30cm (地点乙)
46	环・蓋	暗青灰	緻密	硬質	口縁部 外直径 12.8	外面口縁部上半に弱い 2条の凹面、口上端を つまみ上げ腫くする。	外面ヨコナゲ。 内面ヘラケズリ、後ヨ コナゲ。	O Sトレンチ南東方 -30cm (地点乙)
47	壺又甕	灰白～ 淡黄	粗砂散在 (石英粒 多い)	やや 軟質	口縁部 外直径 19.4	弧状に外反する口縁部 を同等の厚さにする。	内外面とも口縁部に右 上りのナデ。 内面肩部をヘラケズリ。	地点1-A
48	提 又 甕	青灰	緻密	硬質	口縁部 外直径 7.8	直立立ちの頸部と内凹 がみの口縁上半に2条の ヘラガキ沈線。	内外面ともヨコナゲ。 つまみ上げにより口上 端を腫くする。	地点1-B
49	瓶	灰一黒褐	緻密	硬質	口縁端 外直径 6.7	器く外反させ導くされ た口縁端。	内外面ともヨコナゲ	地点3-A
50	壺又甕	黄 橙	緻密 粗砂点在	硬質	口縁部 外直径 21.0	肥厚し、平底の口上端 面。	外面ヨコナゲ。 内面口縁部ハケメ、ヨ コナゲ。	地点4-A
51	壺又甕	灰 黑～ オリーブ 黑	小砂散在 緻密	硬質	脚部直 径 12.2	低い脚と浮いた底面	脚部側面、底面に凹面 をつくり脚下半部内外 面ともハケメ、ヨコナ ゲ。	地点4-B
52	壺	灰 白	緻密	硬質	口上端 部外径 9.7	直立立ち外反の頸部。 弧状内窓の頸部そして 口上端に1条の凹面。	内外面ともハケメ、ヨ コナゲ底面に内直徑約 6cmの転台跡。	地点5

[石器]

53 : 安山岩類の石で表面を研磨した扁平形、効能形の約4個体に見える。尖端は平滑をなし縫隙部側面に1.5cm角の打撃痕
らしきものを8個見る。(出土地点AトレンチNo.5)

54 : 磨石であり鋭利な数条の使用痕がある。研磨に用いた為金体として若干右回りにねじれている。
(出土地点AトレンチNo.12)

55 : 宝武岩又緑縞岩系の剣片を使用した石刀と考える。刃部の片面に研磨加工を見る。(出土地点Hトレンチ東部-40cm)

56 : 安山岩系の自然石砥石とも見える。上面は研磨の為に凹面となっている。そして片方の側面にも平滑な面があり使用痕
と思う。底面には上面の凹面の長軸に略横交するゆるい凸凹面を感じる。
(出土地点IトレンチNo.12)

57 : 安山岩を使った模造石斧、刃渡り約4.0cm(一部欠損)長さ5cm、厚さ0.5cm、刃部を両面入念に研磨し、その他も粗
氣味に研磨している。(出土地点Jトレンチ6-1)

58 : 円筒主部より出土した唯一の石であり、石室又は石棺の一部とは考え難い安山岩である。形態として、尖頭器型をし
ており、先端部の半分が欠損しているように見える。

[牛歯]

59 : Aトレンチ西部。地表下-20-30cmくらいで出土した歯であり、清水忠人(県博学芸員)、松下理一(鳥取県十字病院歯
科医)氏によると現在より小型の成牛、上、第2後臼歯、右ではなかろうか。

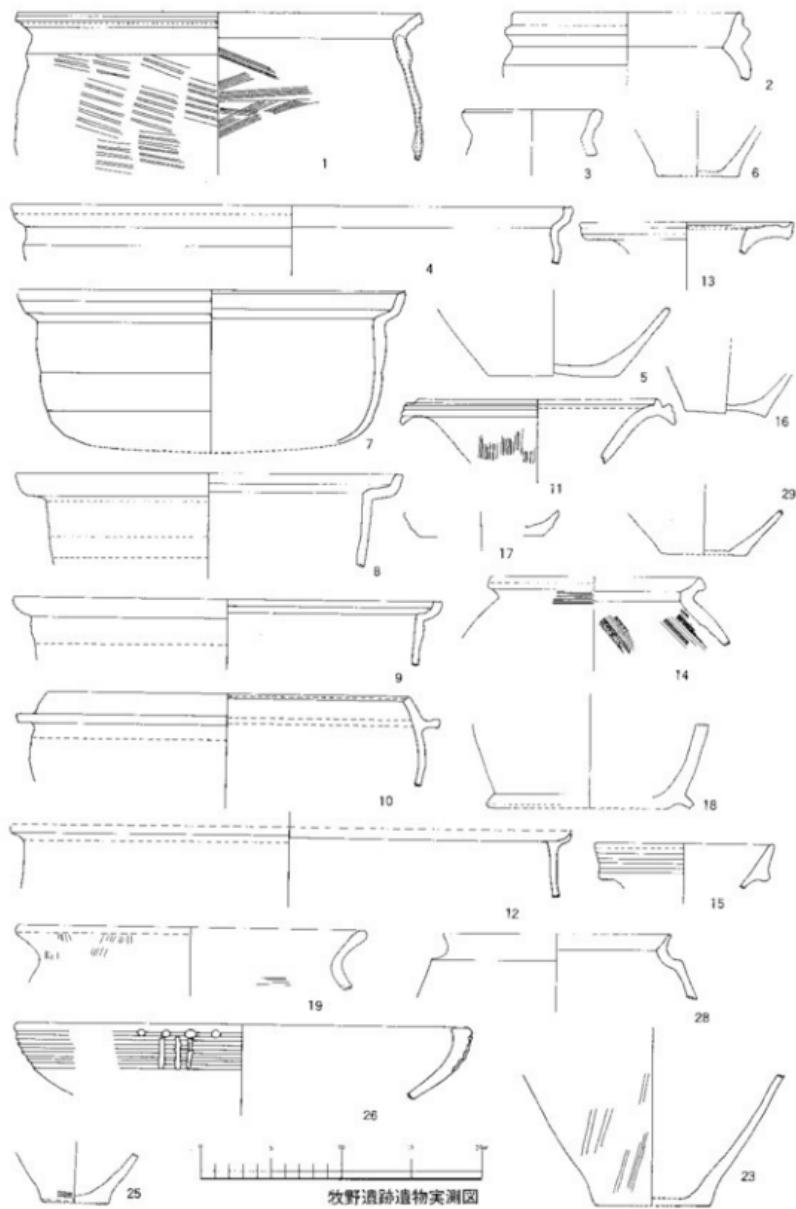
[鉄器]

60 : Qトレンチ南壁より出土した刀子。現存長11.7cm、身巾2.2cm、厚さ0.3cm。

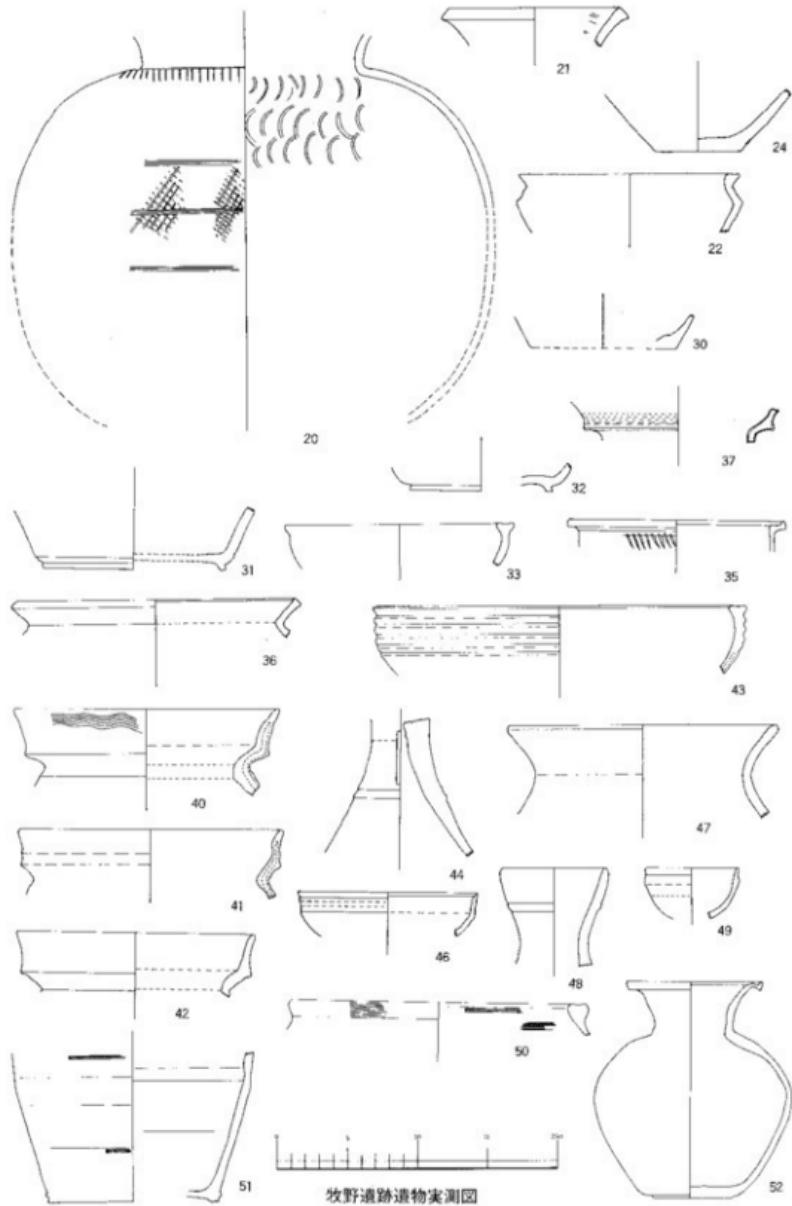
61 : 円墳主体部出土の鉄鎌。現存長9cm(含茎2.7cm)身巾2.8cm、身厚0.3cm、断面が扁平なダ円形をなし、有茎の三脚
鎌(逆鉤)

62 : 円墳墓出土の刀角。縦と横の差のあまり大きくなり直方体の木権と思われ、鍔は上(5ヶ)、中(7ヶ)、下(10ヶ)、最下
(17ヶ)、と四段に分かれて出土し、又、外方より2本出土した事から二重になっていたかも知れない。

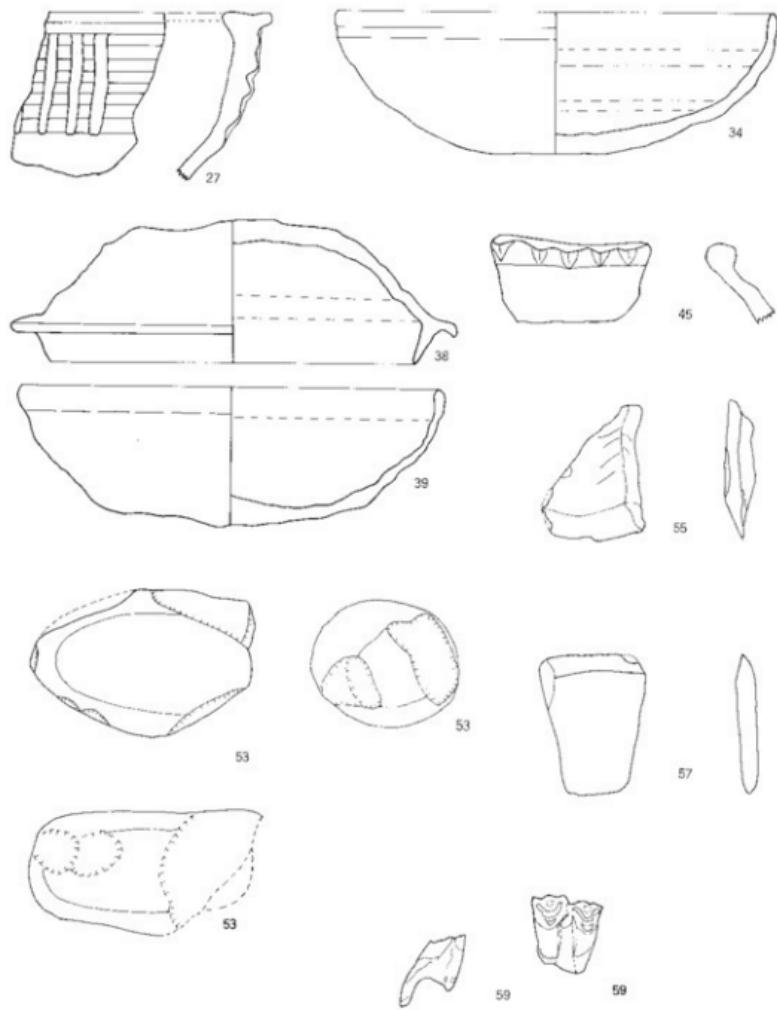
最長斜の長さ7.5cm、断面は長方形であるが、鉋頭がダ円形(中段より出土)をしたもののが船釣を思わせる。



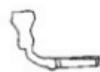
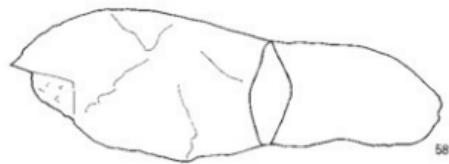
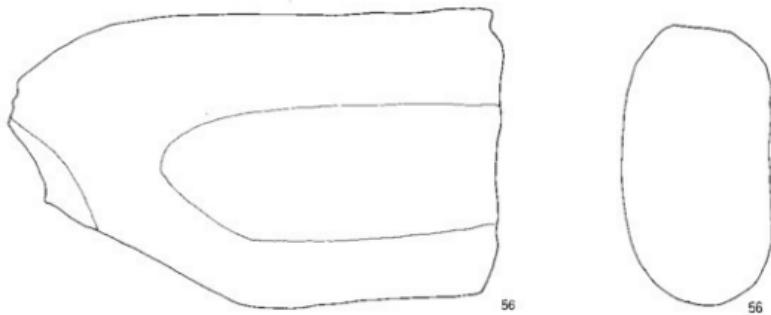
牧野遺跡遺物実測図



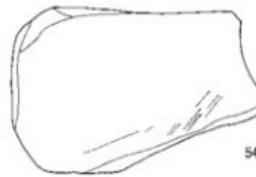
牧野遺跡遺物実測図



牧野道跡遺物実測図



62 (上)



54



54



62 (中)



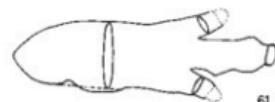
54



62 (下)



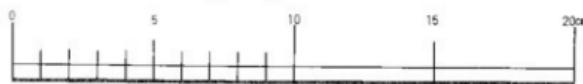
60



61



62 (最下)



牧野遺跡遺物実測図



正面実測図

〈頭骨計測値〉

- 1) 瞰弓幅 9.78cm(?)
- 2) 中頭幅 8.00cm(?)
- 3) 上顎高 5.79cm
- 4) 鼻 幅 2.63cm(?)
- 5) 鼻 高 3.08cm
- 6) 鼻根幅 1.50cm(?)
- 7) 鼻根模弧長 不明
- 8) 頭骨最大長 17.67cm
- 9) 頭骨最大幅 12.78cm
- 10) 頭骨水平周 53.5cm
- 11) 全側面角 77.5°
- 12) 曲唇偏面角 60° (?)
●尖頭に属する
- 13) ゴルマン示数 59.23
●高上顎型に属する
- 14) ウィルヒョウ示数 72.3
●広上顎型に属する
- 15) 鼻示数 85.36
●広鼻に属するも不明確
- 16) 頭長幅示数 72.34
●長顎型に属する

注—1 約4m離れて接写した頭骨を、実物の1.33倍に拡大し、トレースを行なって計測した。
注—2 計測法は、鈴木尚 (1963) : 日本人の骨、岩波書店を参考とし、不正確な計測値にはマーカーを記した。

注—3 写真撮影時、ミシン糸50番を使用して1cmメッシュを作製した。
又、撮影方法について、松下理一 (鳥取赤十字病院歯科医) 氏の助言を得た。

側面実測図



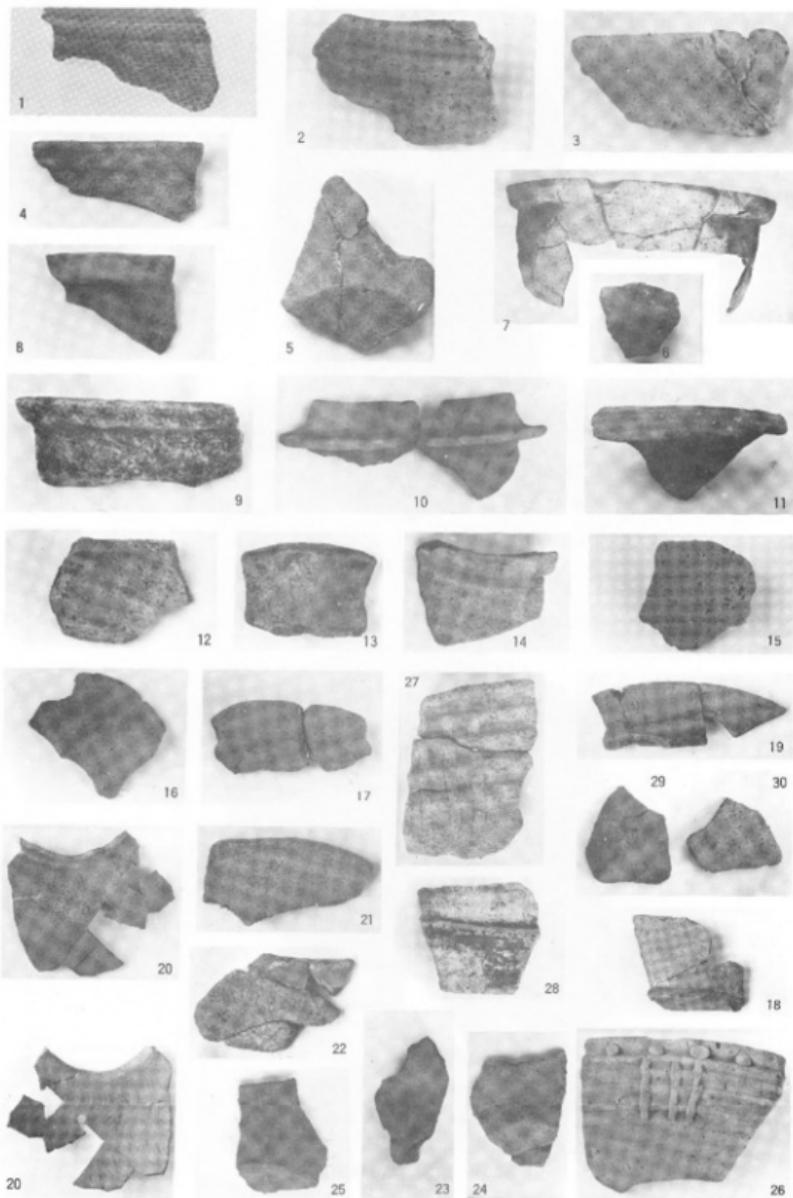
插図-26 木棺墓出土人頭骨

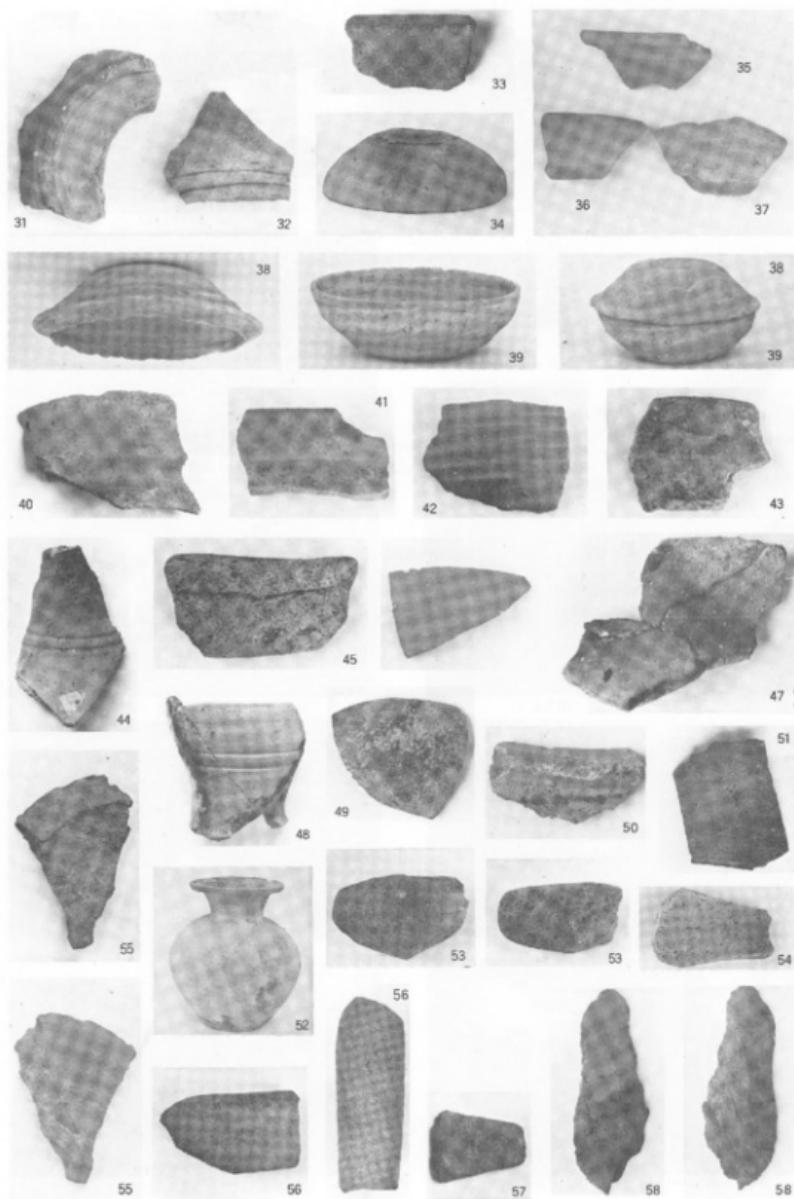


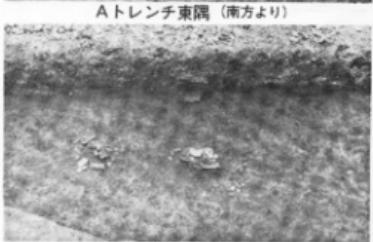
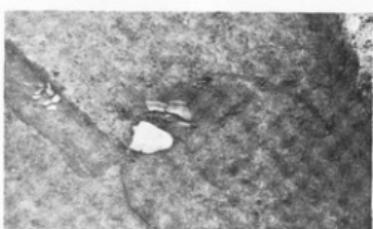
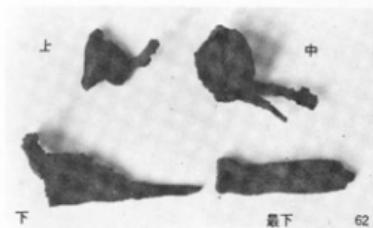
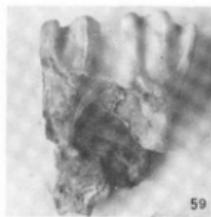
頭骨正面（木棺墓出土）



頭骨侧面（木棺墓出土）

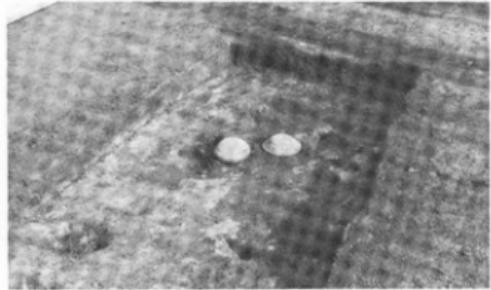
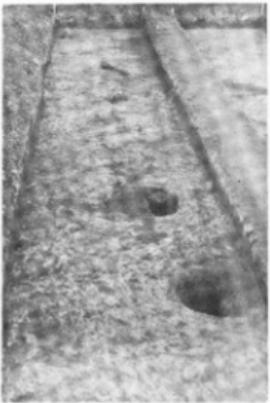




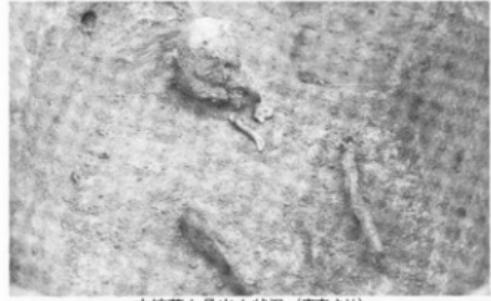




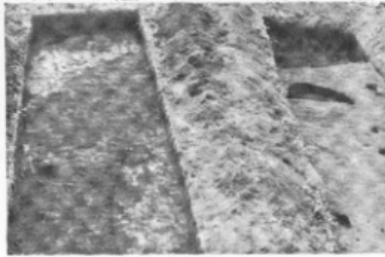
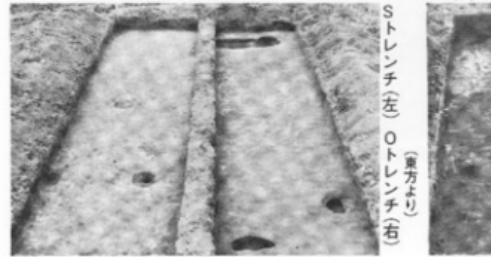
Q トレンチ供獻壊出土 (北方より)



円墳主体部 (北方より)



木棺墓人骨出土状況 (南方より)



あとがき

本調査で判明した事柄は、(1)牧野古墳（高塚）は7世紀初期の築造である。(2)木棺墓（屈葬）は円墳とは直接的な関係を認め難い。(3)Qトレント内出土墳墓（直葬）は供獻土器が円墳主体部出土のものと同質の塑形作製である事から6世紀末～7世紀初期と判断。ここでは円墳上でも見られた焼土の解釈を今後の課題としている。つまり、円墳主体部出土の壺・蓋の焼成が悪い事と、隣りにある焼土とは因果関係があるや否や。(4)弥生後～末期と考えるFトレント内土墳墓と、その直上に出土した7世紀初期と判断する須恵器壺との相関をどのように解釈するか。(5)A・Bトレントは中世の住居址である可能性を有する。(6)円墳上で見られる径20cm大の腐植土穴が規則的配列をしているのは何を意味するか。(7)丘陵下位の谷底平野にも6～7世紀の土器片を確認するが、当時の集落、経済基盤はどの程度の規模であったのか。

以上、小規模な調査ではあったが、多くの問題を残している。今後は、八東川下流域の発掘調査により比較・検討を重ねて行きたい。

執筆に際し、田崎和江（岡山大学温泉研究所）先生には火山灰について、小型の成牛と判断される齒については清末忠人（県立博物館学芸員）、松下理一（鳥取赤十字病院歯科医）両先生に、御指導を頂いた。末筆ながら記して感謝致します。



Qトレントにて作業員一同記念撮影

鳥取県八頭郡船岡町
牧野遺跡発掘調査報告書

昭和55年3月19日

発行 鳥取県八頭郡船岡町船岡539
船岡町教育委員会
編集 鳥取県八頭郡船岡町船岡539
船岡町教育委員会
印刷 鳥取県鳥取市柏生町2丁目413
巧 印 刷